

へたばかりの「リナ」が如何に是等の必要な學術を教へらるべきかといふ考察に多くの頁を割いたのであります、フレーベルの原理は「何事もその時機に於て行ふべきこと、決して大早計に爲さざること」であります。

幼稚園の保姆は兒童を遊ぶにも働くにも他人にたよる、獨創性と自發性のない人形として了ふといふ非難があります。しかしこの非難は悪い幼稚園には當嵌るかも知れませんが極力自發性の發揮に努めて居るフレーベルの理想から見れば氣もないことでもあります。

水田氏著『お話の研究』を讀みて

倉 橋 生

東京高等師範學校訓導水田光子氏の新著『お話の研究』は幼児教育上近來絶好の著述として、廣く家庭及び幼児教育者諸君におすゝめし度いと思ふ。

又フレーベルは兒童の遊戲から眞の自由を奪ふ、何故ならば彼の遊戲は技巧的であるからと。この非難に對しても前と同じ答をすればよろしいのであります。

幼稚園の兒童は落附きがない、言ふことをきかない、無性である、遊ぶことばかりを好む、又以上とは反對に幼稚園の兒童は質問をしすぎる、物を尋ねることをあまり好みすぎる。是等の非難に對しては殆んど答へることの必要を認めません。

(F.H. Hayward. The Educational Ideas of Pestalozzi and Frobel. Chapter III)

『お話』が幼児の爲に如何に幸福なる世界であり教育上如何に貴重なる材料であるかは、更めて説くまでもない。之れは古く／＼から世界のあらゆる國に於て行はれて來た、最も自然的にして最も

普遍的なる最古の幼兒教育法の一つであるのみならず、近年に於て、更に新しい注意と研究とが喚び起されて更めて教育的價值と必要とが高唱せられて來た問題である。現に亞米利加に於ける此の方面の熱心は最も著しいものであつて、特に其の専門の雜誌さへ發刊せられて居る。我國に於ても識者の特に此の方面に意を用ゐ力を竭さるゝこと次第に尠くない。殊に實際的にお話の供給の豊富なることは、實に驚くべき程に盛であると言つてよい。しかも、『お話』そのものゝ理論的研究に至つては未だ甚だ乏しい。勿論極く専門的に其の研究をして居る人は無いではないが、一般的な研究者に便利なる著書の少ないことは、常に遺憾とする處であつた。そこで水田氏の此著が出たのである。實に多くの期待と要求とに適合する、歓迎すべき著述といはなければならない。

『お話』の論の中で、所謂舊式と新式といふ言葉が屢々用ゐられる。斯ういふ言葉を用ふるのは勿

論漠然として學問的ではないが、其の意味は詰りお話の教育價值、從つてお話に對する教育的要求を、狹義に解するか廣義に解するかといふことである。すなはち、昔の論では教育的に價值あるお話とは狭い意味、嚴格な意味の道德的倫理的なものに限られて居て、從つて、お話そのものゝ本質的價值が餘りに究屈に解釋せられ、又究屈に取扱はれて居たのである。然るに、近來に於ては『お話』の教育的本質が、すつと自由なものになつた。一口にいへば、必ずしも直接道德的な教訓を含まないでも、其の自然的な、子供に極く適當したる興味といふもののものに、非常に貴い價值があるとするのである。此の考へ方が更に歩を進めてはなまじ狹義な教訓的な意味などを含んで居ない。方が——居ない處に、お話の價值があるのだとさへ言はれるのである。

水田氏の執つた立場は、此の所謂新式な考へ方の中の穩和的ともいふべきものである。此の書の

緒論に於て、

『次に童話教育の唱導者達が、「お話」の價值を單に修身教育の上にのみ認めようとするのも、餘りに一面的に墮してゐると思ひます。私の考へではお話の使命は決して修身教育に局限されるものではないと思ひます。勿論お話が兒童の徳性の涵養に與つて力あることは、明白な事實でありますが、それと同時に趣味を啓發し怡悅を賦與する力の偉大なことも、否定し得ない事實であります。そして廣い意味、否、むしろ一層善い意味の教訓といふ立場から見れば、怡悅の賦與趣味の啓發は、徳性の涵養と相依り相俟つて、始めて完全な兒童の心の發達が期し得られると思ふのであります。それ故多くの人士が徳性の涵養といふ固くるしい方面のみに眼をつけて、怡悅とか趣味とか云ふ、ふわりとした、ゆとりのある光つた方面を閑却してゐることは私の第二に遺憾とするところであります。』

といはれて居るのは、實に著者の此の態度の最よく、言ひあらはされて居るものである。吾人は、特に、此の意味に於て、此書を奨め度いと思ふのである。即ち「お話」の細い部分的な研究的な知識に入る前に、先づ吾人の信ずる最も正當なる意味の「お話」觀の普及の爲に、此著述の廣く讀まることを希望するのである。而して著者に對しても先づ此意味に於て其の勞を謝し度いと思ふのである。

次に水田氏の此の著書の優れたる點は、全體の考へ、全體の論のし方が、俗な言葉で言へば、如何にもよくこなれて居ることである。之れは著者の敬服すべき文章の力にもよることと思ふのであるが、全體の統一、部分の配列、材料の選擇等が實によくこなれて居る。そこに此書を讀む時の非常な快感がある。又此の種の論述に、例話の引用は極めて困難なことであつて、例話に就て資料が少なければ少ないなりに、多ければ多いなりに、

其の適當なる撰擇は實に六かしいことである。しかるに此點に於ても、實に見事に成功せられて居る。中には外國の例話も用ゐられて居るが、我國の例話も古い材料新しい材料から自由に巧に執り來つて、それが實に適所適材の使ひ方がせられてある。そこで、吾人が此の著書を讀んで居る間に直覺的に感じた事は、著者の「お話」に關する研究が熱心なるのみならず其の潜心の必ず一朝一夕なことでないといふことである。吾人の寡聞なる著者の「お話」研究に就て、今まで少しも知ることが出来なかつたのであるが、此の書にあらはれたる處によれば、著者は必ず此問題の久しい研究者であるに相違ないことが信せられる。吾人は再び此の意味に於て、更に此の書を尊重し、又廣く奨め度いと思ふのである。すなはち、此の書は、「お話」に關する知識を與へる許りでなく、著者の態度を通して、「お話」の眞面目な興味と、本氣な研究の氣分とを讀者に與へるものであるからである。

而して吾人は、此の著述を敬重すること斯くの如くなるにつけて、著者に向つても更に一言の希望を述べ度いと思ふ。それは第一に、著者の「お

話」研究が將來、尙益々繼續せられて、愈々問題が擴大せられ、研究が深入りせられて、我國の「お話」研究を大成せられんことである。こんなことを言ふは却つて著者に對し禮を失することであり殊に所謂いはずもがなことであるかとも思ふのであるが、吾人は著者に對しての個人的希望といふよりも、我國の「お話」研究といふ學問的、教育的事業そのものゝ爲に、此の希望を述べざるを得ないのである。且つ吾人平生の主張として、幼兒教育に關する研究は、婦人の研究事項として最も適當なるものであつて、將來我國の婦人諸君の知識的事業として、此の方面の問題を最もすゝめ度いと思つて居るのである。そして、此の方面の立派なる業績の一つでも多く、我國の婦人界から出づることを常に期待して居るのである。そこへ著者を得たのであから、吾人の此の著述を特に喜び迎ふるもの、決して所以なしとしないのである。

従つて又、未見の著者に向つて、更に進んで斯くの如き希望を述べ、大に將來に期待する所以なのである。(東京市京橋區銀座二丁目大日本圖書株式會社發行、定價金壹圓五拾錢)